

## 第二十話

### 国香最後事付土浦城落事

『前太平記』上 卷第三 五十九頁から六十一頁より

#### 【国香死す】

こうして兄弟の皆さんは、父を助けて城中に帰り、色々と御看病なさるが、ちょうどその時気温が著しく（下がり）、とりわけ大きな傷であるので、本当に（存

折しも寒気甚だしく、殊に大事の手なれば、誠に

命が）叶うのは難しく感じてしまった。苦しそうな呼吸の中で、少し目を開き仰っ

叶い難くぞ見えにける。苦しげなる息の下より、稍目を開き宣ひけるは、

たことは、「私はもう齢な六十余りとなり、朝家のために命を落とす事、老後の思い出がこれであるようだ。しかし、私が死んだと知らせるならば、朝敵らはいよいよ

但し、我死したりと披露せば、朝敵弥

よ機会を得て、東国は全て彼が得ることとなるだろう。これこそ私の黄泉までの心

機を得て、坂東は皆彼が有となるべし。是こそ我が黄泉までの妄念なれ。

配である。お前たちは揃って準備をして、朝廷に向かい申し上げ、少しも（私へ

汝等相構へて、

朝廷に向かい奉り、

少しも

の) 不義理を感じず、一人でも生き残っている家臣や郎従を十分に助け、山林に潜

不義を存ずべからず、

一人も生き残らんとする家の子郎従を能く扶助し、

伏して節度使 (老) の下向を待ち、計画を立てて朝敵を殲滅し、父の死後に亡骸を清

めてくれ。たとえ重大事になるとしても、決して死ぬことはあってはならない。そ

もそも、死は近いものでたやすく、生は遠くて難しい。このことは兄の貞盛にも父

夫、

死は近ふして易く、

生は遠くして難し。

の遺言であると言い聞かせよ。伝えるべきことはこれだけだ」と、仰る言葉に息も

こもらずにすぐに事切れなされた。ああ、先の過ちと後悔するには仕方がないと言

嗚呼、

先非悔ゆるに甲斐無しと雖も、

っても、今回の合戦は繁盛の意見のように、城中で敵を待っていたならば、このよ

此度の合戦繁盛の意見の如く、

城中にて敵を待たば

うにはならなかったはずなのに、そうなるべき前世の報いとは言いながら、嘆かわ

斯くは有るまじきものを、

然るべき前世の宿習とは云いながら、

うたてかりし

しかった事件などである。

事共なり。

## 【土浦城陥る】

もう大将が討ち死になさってから、皆戦意を失い力をなくして、我先にと落ち延びていったほどで、昨日までは三千騎余りと申した城中の軍勢も、僅かに残る者としては、八十騎には及ばなかった。今は城を守って多勢の敵に当たることは、到底敵わなそうだったので、「ひとまず武蔵や相模へ越えて、父の遺訓の通り勢いをつけて敵に対峙しよう」と言って、十五日の夜ほどにこっそり城を出発なされた。全て国中の全員が敵になったと噂されたので、「この城が落ちたと分かれば、暴徒が

「此城落ちたりと見ば、 凶徒

もしかしたらたがい違いになって道を塞ぐこともあるだろうか。無理に城を出て、

如し差し違ふて道を塞ふさぐ事もや有らん。 愁に城を出で、

この暴徒の中心人物らの卑劣な刃によって、名声をお失くしになることも情けない

宗徒の人々の、賤しき匹夫の鋒に、 名を失ひ給はん事も口惜しかるべし。

だろう。それならば計画を立てよ」と言って、この役とあちらの櫓に旗だけを結び

さらば謀を致せ」

つけて、櫓の狭間 (弐) に甲冑を持たせかけ、まだ城中に大勢が籠っているように見せたのだった。夜が明けたところ、将門は三万騎あまりを率いて、前方後方、三方向から同時に押し寄せて、鬨の声をあげてみたのだった。しかし城中は、静まりか

えって音もせず、さては敵の計画であるのだろうか。近寄って失敗するなど言っ  
て、矢が届くぎりぎりの場所まで近寄れず、また鬨の声を上げたが、元々人がいな  
あので、鬨の声を合わせることはない。この場所に安房国の者で、長狭七郎保時と  
いう者が、よく考えて「どうにも敵は今夜逃げ失せて消えたと思われるな。もし敵  
の作戦ならばこのようにはすまい。旗だけを立てて籠っているように見せ、また鬨  
の声を合わせないのは、きっと逃げたからだろう。これこそ天が与える機会である  
ようだ。我一人で高名となるために準備しよう」と思い、南西の出し堀 (参) の下に  
立ってきつと見上げたところ、櫓の狭間に鴉の羽ばたく音がした。やはりと思い、  
持っている楯を梯子にし、堀の上にするすると上り、木戸 (肆) の中を見ると、あち  
らこちらに焼き捨てた篝火が少し残って、敵は一人もいなかった。保時はゆっくり  
と城中を回ってみるが、ただ幕だけが残って陣内は暗く物寂しい。その後表門の木  
戸を開き、味方のぐんぜに向かって申し上げたことは、「さてさて今回、諸国より

「さて今度、 諸国

御追討のために、親王が当国にご進軍のところ、この厳しい寒さの中で、今朝か

御追罰の為に、 親王当国に御進発の処に、 此厳寒の中に、 今朝より

ら皆さん気を張り詰めなされる痛ましさに、進軍のご準備のために、酒肴用意いたし

面々気を詰め給ふ痛はしさに、 御設けの為に、 酒肴を用意仕て候。

てございます。親王へ（直接言うのは）憚られる。お供の皆さん、少しこちらへ御

親王へは憚り有り。

御供の人々、

少々是へ

入城されて一杯（した上で）お聞きになってくださいよ」とふざけたところ、敵の

御入り有って、

一献聞こし召され候へかし」

計略かと恐れて近づかなかった者たちが、互いに目と目を見合わせて、一斉にどつと笑った。こうして前方の兵の五百騎余りは、木戸の中へ駆け込み、駆け出して、勝鬨をどっと上げさせ、宴会を始めようぞと喜んですぐに下野国へと出発する。

---

## 注釈

※壱・節度使……中世以降、朝敵討伐の命を受けた大将

※弐・狭間……櫓にあげられた窓。物見や、石や矢などを打ち出すために用いられる。

※参・出し堀……射撃や物見のために、城の堀の一部を外へ突き出したもの。

※肆・木戸……城門。

---

将門パート…四年ぶりの更新……………（申し訳ありません）

これから将門公が亡くなられるお話まで可能な限り走り続けるつもりです。お見守りいただけましたら幸いです。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(\_\_)m

公開：2021/11/2

海熊童子

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://www.gekkaan.com/>）をご記載いただけましたらご自由にしていただいて結構です。※※※